

## 明治初期の江差町における書物の流通

——江差町郷土資料館蔵関川家文書を中心に——

木戸 雄一

### I. 基幹研究「十九世紀の出版と流通」について

私は現在、基幹研究「十九世紀の出版と流通」というプロジェクトに参加しております。このプロジェクトの目的は、三都以外の地域で実際に人々が手にしていた書物が、どのような経路でもたらされたのかを調べることによって、読者の書物へのアクセスが、近世と近代でいかに変容したのかを探ることです。昨年この場でご講演された鈴木俊幸氏のお仕事などによつて、近年開拓されてきた有望な研究分野であろうと思います。しかし、それゆえに、対象とする時代によつてどのような資料が使えるのか、いまだ模索されている分野でもあると思います。本プロジェクトがそこに少しでも新たな知見を付け加えることができるのかどうか、とにかく望みのありそうな文庫を調査し、資料に当たってみなくてはわかりません。

そこで、プロジェクトを始めるに当たっては調査研究対象を北海

道・東北地方の文庫に絞りました。まず選んだところが、江差町郷土資料館・八戸市立図書館・弘前市立図書館・酒田市立光丘文庫です。いずれも縦覧所や読書会、有志の蔵書がそろっているところなのです。つまりその地域に以前から集積されていた書物群があるところ、そしてそれを利用する施設や方法を持っていたところなのです。なるべくその地域で読まれた書物群を対象にしたいと考えたためです。

そして、弘前を除けば、これらの文庫はいずれも海に面した重要な港町にあります。弘前も青森との交通が盛んでした。つまり、海路を通じて運ばれてくる書物に着目することで、北の書物の流れを把握すると同時に、日本全国の書物の流れの一部として、これらの書物群を考察することが出来るのではないかと考えたのです。

しかし、一年ほど調査とデータの整理を行っていく過程で、これらの地域で必ずしも海路が書物流通の経路として特権的な地位にあるわけではない、ということがわかってきました。例えば、酒田市立光丘文庫では、江

戸に直接注文して、陸路で運ばれてくる物の方がむしろ多いようです。そして、これは鈴木氏も昨年この場で注意を喚起しておられたことですが、流通情報を得られる資料が非常に限られているということが、このプロジェクトの歩みをいささか遅々としたものになっています。読書会などの読書行為の研究にややシフトを変えるか、新聞の出版広告などの新しい資料の開拓に着手するか、または、調査研究対象を別の文庫に変えるか、いろいろな対策が考えられますが、流通情報の獲得の困難を現在実感しているところです。

しかし、そのような中で、江差町郷土資料館の関川家文書は、やや効率よく書物の流通情報が把握できる数少ない文庫です。個人文庫であり、本の購入者という最初に必要な情報についてあまり迷う必要がないこと、そして、日記や取引記録など、書物の購入や譲渡などに関する情報が得やすいことなどがその理由です。そこで、今回は関川家文書のうち、関川家周辺で書物が最もよく動いた時期と思われる、新聞縦覧所開設前後の明治初年代に絞って発表します。

## Ⅱ. 江差町郷土資料館所蔵関川家文書について

では、最初に関川家及び関川家文書について説明します。関川家は越後出身の豪商で、北前船の経営を行っていました。今回の発表に関係するのは、江差の代表的人物として知られ、新聞縦覧所を開設した八代目平四郎、それから、その息子であり、明治初期に東京で商売や情報収集などを行っ

ていた九代目与左衛門です。彼らは幕末から明治初期にかけて平田国学に傾倒し、江差姥神大神宮宮司の藤枝家などとともに、地域の啓蒙活動に従事していました。また、江差は俳諧が盛んで、平四郎は一鼎という号で、東京の鳥越等裁に師事していました。

関川家文書は一万八千点弱という膨大な文書を有しています。先方でお伺いしたところ、このうち、近世期のものはほぼ整理が終わっているということでしたが、近代の物を中心にまだ半分以上の文書の整理が続いているということです。簿冊形態のものはほぼ整理が終わっているようですが、取引文書や書簡・俳諧関係の文書などに未整理のものが多数あるようです。それをふまえたうえで、書物の流通という観点から関川家文書を見た場合、問題になる資料は大別して次の五種類になるでしょう。

1. 取引文書：注文書の覚・書籍の送り状など。但し未整理多数。
2. 日記：弘化四年から明治三十二年まで断続的に百二十六冊。八代目平四郎の日記の一部（明治二年～十一年）が『江差町史第四巻』に所収。ほかに九代与左衛門による出函日誌・出京日誌などがあり、書物や新聞に関する、江差からの注文の内容、入手方法、江差への送付の記事が見られる。

3. 新聞縦覧所：新聞縦覧所関係文書が一括して保存されている。一部は『江差町史第四巻』で見ることができる。

### 4. 新聞：

- (1) 新聞縦覧所備付のもの。郵便報知新聞（明治七年～明治二十三年）  
函館新聞（明治十一年～明治二十四年）

(2) 地元紙。かもめ・江鷗新報・江差日日新聞・江差日報・江差新報・

#### 江差商況周報

(3) 主要港の商業新聞。敦賀商報・東京商品取引日報・尾道商報・大阪商報・酒田新実業日報・東京株式取引日報ほか。

(4) 各地の新聞。此花新聞・明治日報・秋田遡迹新聞・大阪日報・大阪朝日新聞・大阪毎日新聞・峡中新聞・甲府日日新聞・真砂新聞・西海新聞・静岡新聞・横浜毎日新聞・日本・日出新聞・青森新聞・淡路新聞・北のめざまし・読売新聞・東京日日新聞・松本新聞・新潟新聞・山形新聞・広島新聞・四日市新報・改新新聞・日進新聞・開知新聞・東京絵入新聞・田舎新聞・東京曙新聞ほか。

5. 書籍・雑誌：(1) 新聞縦覧所備付の書籍・雑誌。(2) 江戸期以来関川家が私的に所蔵していた書籍・雑誌。(3) 関川家十代常雄の東京時代の蔵書。

なお、このほかに俳諧関係の資料を加えるべきだと思いますが、私自身その方面の学識がないということもあり、今のところ全く目を通すことが出来ていません。これはプロジェクトの分担として今後考えるべき課題です。この中で、今のところ最も有益な情報が得られるのは2の日記です。江差における書物の注文や受け取り、縦覧所に入る書物の情報などは、八代目平四郎の日記で得られます。また、東京で江差からの注文を受けて本を購入したり、新聞を江差に送ったりといった情報は、九代目与左衛門の出京日誌で得ることが出来ます。そこで、本発表はこの二つの資料を軸にしながら新聞縦覧所開設前後の書物のやりとりを確認します。

### Ⅲ. 新聞縦覧所の書籍について

江差で新聞縦覧所が開設されたのは明治七年ですが、この縦覧所には前身ともいえる時期があります。「江差町史第六巻」によれば、江差には、姥神大神宮宮司の藤枝家によって営まれていた藤枝手習塾という教育機関がありました。それが、幕末に皇学舎と名を変えて、平田国学を奉じて教育活動を展開していきます。八代平四郎が中心となってこの改革を行い、九代与左衛門以下、宮司の藤枝政延や、当時最新の洋学を修めた本多正幸・古郡真直といった若い知識層が、皇学舎に教育を目的とした文庫を開設し、書物の蓄積と公開を始めました。次の「資料1」は、その時期に購入されたと思われる書物の覚です。四書五経など、教科書として使用されたとされる物や、「草茅危言」「通議」など、いかにも幕末の尊王攘夷思想を養成するような書物が並んでいます。

#### 【資料1】

##### 覚

- 一 五拾三匁 会玉篇 十二冊 極上板本
- 一 式拾五匁 訓蒙 故事要言
- 一 式拾四匁 草茅危言
- 一 拾毫匁 山陽先生 通議
- 一 拾九匁 孔子家語

一 三拾一匁 後藤点 五經 上本

一 拾八匁五分 同 四書

メ百八拾匁五分

(略)

午五月十五日

関川与兵衛様 高岡屋忠助

濱屋文左衛門様

播清様

(「覚(午五月十五日、高岡屋忠助より関川与左衛門ほか宛)」(7—

3668—2))

この皇学舎の文庫は明治六年に焼失しました。教育機関としての皇学舎はその後もしばらく存続しますが、文庫焼失の翌年に新聞縦覧所が開設されたわけです。縦覧所開設の計画が出てきたのは、関川平四郎日記によれば明治七年の二月二十四日です。【資料2】をご覧ください。これは『江差町史第四巻』の平四郎日記から、縦覧所と書籍に関する事柄を抜粋したものです。ただ、俳諧関係や教導職関係の記事の中にも書物に関することがありますが、それらは今回は便宜上割愛しています。

## 【資料2】

明治七年

07/02/24 (略) 新聞見読所願立之事 倅与左エ門へ内談ス(略)

07/03/03 (略) 増田氏江 有志達世話向頼合ス 森氏来ル熟読所之事

談ス 鈴鹿氏ヲ訪ふ 西川氏ヲ訪フ願書之事ヲ談ス

07/03/04 (略) 願書下案ヲ以藤枝政信ニ談ス 増田氏来ル

07/03/06 森氏来ル 注文増補新令字解全 (略)

07/03/09 縦読所拝借地願書本多恒斎ヲ以出張所江差遣ス 森氏来ル

(略) 筑前戦争ヲ聞事二通、西国立意論十一冊、自由之理

六冊已上

07/03/12 (略) 杉野氏来ル 上方新聞書写し一読ス

07/03/13 森氏来ル 側面図之事申来ル(略)

07/03/25 (略) 江刺新聞ヲ視ル

07/04/02 (略) 与印へ注文書左ニ(略) 増補新令字解 二冊(略) /

07/04/03 (略) 森省吾殿東京注文書 与印へ相渡ス事

07/04/07 (略) 与主人東京行出立ス

07/05/15 (略) 古郡真直殿より御日誌別紙之通縦覧所江呈上致し度旨

申来ル事(略)

※この間縦覧場建設の記事あり。

07/09/27 (略) 縦覧場入用之内へ金十両森省吾江内渡ス

07/09/28 縦覧場入用内渡しノ一、金五十五両 森氏へ相渡ス

07/09/30 縦覧場惣仕上ケ坪十六工之事 森氏江申遣スノ金八両也 森

省殿江相渡ス事(略)

07/10/22	(略) 縦覧場張付向頼合ス(略) 金沓両森省吾へ渡ス	08/07/08	(略) 池田豊左工門来テ 縦覧場新聞連名之内相除呉候様
07/11/13	(略) 縦覧場投書有之此段御出張所へ届出候也	08/09/04	護居森氏迄先達而申入置候由持語之事(略)
07/11/17	(略) 報知新聞来ル(略)		(略) 東京下荷物解森省亮渡ス事(略)
07/11/21	※縦覧場開場	明治九年	
07/12/03	(略) 金沓両藤枝書物寄附ニ遺ス夫池田氏江相渡ス(略)	09/01/13	東京行佳峯園年玉沓円入書状出ス 倅与左工門行書状共ノ二
07/12/13	利宝丸文治郎江注文書相認 森省吾分なり	09/01/17	イ印便訛江ル 森省吾注文書入ル土産物心得方申遺ス
07/12/22	(略) 森省吾殿江諸弘之内 金二十二両相渡ス/金五両ハ森氏庇普請手伝として遺ス 沓両ハ御内室ニ水引仕立料として遺ス/系本半紙五十枚十九薄様 <small>四寸</small> 小本五十枚十五 懷中七 変化本六 以上森省吾行	09/02/25	(略) 森省吾より源氏五十四集并景園上下・秘事沓部又小本続キ物沓部 代金六円三十銭ニテ置受此所へ六円五十銭相渡シ 釣之分預ケ置候事(略)
明治八年		09/03/06	(略) 縦覧場ヲ訪(略)
08/01/20	森省吾来ル古本相渡ス(略)	09/05/02	(略) 新聞九枚来ル事
08/02/22	(略) 森省吾江縦覧場惣勘定尻金貳円三步一朱相渡ス	09/05/05	利宝丸入港延積下ル(略)
08/05/01	(略) 古利宝丸入港ス文次郎ヨリ書状来ル(略)	09/05/08	(略) 小本四冊・公私案文(略)
08/05/04	森省吾注文之荷物切解之事(略)	09/06/07	(略) 東京ヨリ報知新聞第四月廿五日ヨリ五月廿日迄已上十九枚到来ス(略)
08/05/05	(略) 森省吾来ル 荷解(略)	09/06/08	(略) 縦覧場へ報知新聞四月廿五日より五月廿日迄都合十九枚相渡ス事(略)
08/06/30	辰右工門船、佐之助船兩艘共来ル 東京より六月十二日出し報知新聞第六百三十八号、四月十二日より第六百九十三号本月十二日迄之分俸出先ヨリ(略)	09/06/28	(略) 新聞来ル
		09/09/12	(略) 森省吾大病之事(略)

09 / 10 / 25	(略) 同夜森省吾病死之事	11 / 02 / 06	(略) 縦覧場新聞代高野氏へ才足ス(略)
09 / 11 / 12	(略) 十月卅日悴与左エ門より東京ヨリ書状到来ス 熊本県 下暴賊一条・新文番外巻枚到来ス(略)	11 / 03 / 09	(略) 又次郎来ル教諭書一冊貸遣ス(略)
09 / 12 / 03	(略) 東京在与左エ門并佳峯園或ハ関為山等より書状到来ス (略) 東京より新聞紙十一月四日より十四日迄都合九枚到来 セリ(略)	11 / 03 / 18	(略) 藤倉氏より函館新聞借ル(略)
09 / 12 / 07	森省吾家内来テ借財之義願出ル答テ此後之利足用捨可致候 尚又残り物品々之儀ハ明春改候上受取可申旨申遣し候事(略)	11 / 04 / 06	縦覧場高野氏引上ル(略)
		11 / 04 / 14	東京ヨリ新聞至来ス(略)
		11 / 04 / 19	(略) 報知新聞続六枚至来ス(略)
		11 / 04 / 21	(略) 佐々木律郎来ル 縦覧場願書依頼之事(略)
		11 / 04 / 23	(略) 報知新聞二通相達ス(略)
		11 / 04 / 29	(略) 報知新聞三枚来ル(略)
		11 / 05 / 03	(略) 藤浦氏へ新聞貸ス
明治十年		11 / 05 / 04	(略) 東京梅の本より新誌四冊来ル
10 / 02 / 12	(略) 高野啓助来テ縦覧場守約定ス(略)	11 / 05 / 08	(略) 報知新聞九枚至来ス(略)
10 / 02 / 13	(略) 縦覧場森省吾内義相招転住之義相尋候処 何日ニ而も 差支無之趣申出候事(略)	11 / 05 / 14	(略) 報知新聞六枚来ル(略)
10 / 02 / 20	(略) 高野啓蔵相招ク 森省吾家内ヨリ転宅之儀申出ル(略)	11 / 05 / 18	(略) 報知新聞三枚到来ス(略)
10 / 02 / 22	(略) 此般縦覧場内江高野啓蔵住居為致候ニ付 届出代高野 啓蔵ヲ以差出候事 用紙半紙三通差出ス事(略)	11 / 05 / 23	(略) 報知新聞本月五日ヨリ七日迄三枚至来ス(略)
10 / 02 / 23	(略) 森省吾家内縦覧場より山ノ上江転宅之事 高野啓蔵夫 婦兩人縦覧場江転宅之事(略)	11 / 05 / 28	蒸氣入港ス(略) 東京ヨリ佳峰園書状并摺もの九枚入至来ス 本月十七日出也 梅ノ本より教林新誌六、報知新聞三 ツカ ル木村伊太郎より書状(略)
10 / 04 / 18	(略) 東京開知新聞社より新聞見ル事(略)	11 / 05 / 30	(略) 読売新聞ヲ視ル事(略)
明治十一年		11 / 06 / 03	(略) 報知新聞六枚来ル(略)
11 / 01 / 04	(略) 又エ印江開化問答次巻貸遣ス	11 / 06 / 13	(略) 報知新聞六通到来ス(略)
		11 / 06 / 14	(略) 昨十三日縦覧場井口節男移ル(略)

- 11/06/18 (略) 新聞六枚本月六日迄之分来ル (略)  
 11/06/19 (略) 井口節男来テ縦覧地小普請之事ヲ語ル (略)  
 11/09/06 (略) 福沢文集上下二冊小出氏ヨリ借用ス (略)

この日記でまずわかるのは、縦覧所の初代管理者であった森省吾という人物が、縦覧所開設前後に、東京や関川家の北前船に多くの注文書を出し、荷物を受け取っているという点です。点線で傍線を引いている記事をご覧下さい。これは他の時期の日記にはない記述で、これらの注文書の中に書籍に関するものがあつたのではないかと考えることはそれほど不自然ではないでしょう。事実、東京の与左衛門の日誌には、森から本の注文があつた旨の記述があります。【資料3】の明治九年一月二十五日の項をご覧下さい。

### 【資料3】

明治九年

09/01/25 (略) 後二時三十分西谷儀見舞来リ□所ヨリ油紙包壹箇達ス

仍之清□出ス

改封左ニ (略)

金二百三十円

内百三十円本多行書物係則森之出ス (略)

○森省吾ヨリ注文品左ニ

四書後藤点 十部

但し 壹部八十七銭五分は八函館送候

小学内外揃 十部

但し 三十七銭五分 同前

09/01/28 (略) 日本ばし通四丁目金花堂須原や佐助へ森氏注文ノ四書

小学□□ス申越タルトハ価大二違フ

09/02/11 午後一時本多同行 (略) 又馬喰町二丁目書肆英蘭堂島村利介

方ニ至リ (略)

09/04/05 (略) ○本多氏荷江在所行詵品左ニ (略) ○小本四冊 ○公

私案文 壹冊 (略)

09/05/04 ○午後六時達ス東京金井ヨリ郵便壹封但し在所ヨリ四月十九

日発書□又上ヨリ一通へホヨリ壹通本多ヨリ壹封在中セリ酒

井玄洋父子出京ノヨシ注文品并漁事方申来ル (略) ○景普二

冊 ○開次郎旧平／問答後編 ○四書一部 (略)

09/05/15 (略) 在所ヨリ状数アリ左ニ

○父上ヨリ二通注文書入 ○本多ヨリ一通 (略)

○系図本二冊 前便之分 (略) ○開次郎旧平／開化問答

後篇 (略)

○新聞を前極之事

○本多氏注文

「タン子ル氏、薬家篇并医療大成

「袖珍薬説増補ノ分

「医学雜誌 (略)

○本多行医学雑誌九ヨリ十三冊 ○開化問答二編二冊

(関川与左衛門「行旅日誌 二号」(12—26))

この時、江差から書籍購入の注文書と金が届けられます。これは【資料2】の明治九年一月十三日の項で傍線を付してある注文書に該当します。森の注文は四書と小学内外揃ですが、いずれも十部というのは、縦覧所の書籍としてはいささか数が多すぎるようです。このうち四書は先に【資料1】の書目の中にもすでにあったものです。これらは、皇学舎の教科書としてあらためて購入されたものだったのかもしれませんが。森は【資料3】では「書物係」とされていますが、これが皇学舎における役割だったのか、縦覧所での役割だったのか、これは縦覧所の性格にも関わることで、今後より慎重に考えてみる必要があるでしょう。しかし、明治九年に森が亡くなると、このような頻繁な注文の記述はなくなります。

【資料2】に戻ります。ここでは、先にあげた皇学舎の同人を中心に、書物の寄付が行われていることもわかります。『太政官日誌』を寄附した古郡真直をはじめ、皇学舎で書物収集に尽力した四名がここでも中心的な役割を果たしています。また、江差から東京への注文の仲立ちとして〈与〉という商人の名前が頻繁に出てきます。これは山崎与五右衛門という商人で、金物や雑貨を扱っていた商人です。雑貨商ということで、書物も扱っていたのではないかと推測されます。

さらに、報知新聞が東京から頻繁に届けられています。これが縦覧所備

え付け用だったことは、【資料2】の明治九年六月八日の記事で確認できます。前日に到来した報知新聞を、翌日縦覧所へ移している記事です。この新聞は東京から与左衛門が送っているものです。そのことについては後でまたふれます。

#### Ⅳ. 東京—江差間の書物・新聞の流通

では、次に東京の与左衛門の日記をみることで、江差と東京の間での書物のやりとりを具体的に見ていきたいのですが、その前に、江差と東京の間の航路について確認しておきます。

三菱汽船会社が東京—函館間に定期航路を開設したのは明治七年です。翌八年には函館に三菱の支店が開設されました。さらに明治九年に横浜—下関—新潟—函館の西回り航路が開設されます。函館がこのような蒸気船の定期航路の拠点として栄えたのに対し、江差は長く北前船が海運の中心でした。『江差町史第六巻』によれば、関川家の北前船経営は明治二十八年までです。しかし、明治三十五年、三十八年には北前船との取引記録があるそうです。明治九年の与左衛門の出京日誌では、江差との往来に横浜からの定期航路が使われています。その際、横浜—函館は海路、函館—江差は陸路でした。

では、再び【資料3】の明治九年一月二十八日の記事をご覧ください。先ほど見た、森省吾からの注文品は、金花堂須原屋佐助から購入しています。どうやら価格が伝えられた物とは大きく違っていたようですが、この金花



堂からの購入は同じく【資料3】の明治九年四月五日の記述に出てくる「公私案文」も同様です。これは日記には購入先が記載されていませんが、本そのものが関川家旧蔵書の中にあります。その本の後ろ見返しのはがれ部分に「金花堂」の仕入印が押されています。この本は、その後無事江差に届いたことが、【資料2】の平四郎日記明治九年五月八日の記述でわかります。

もう一つ、【資料3】の明治九年五月四日と十五日の記事で、「開次郎旧平／開化問答後篇」の注文がなされています。これは、小川為治著「開化問答」の第二編を指しています。この本は現在旧蔵書の中に無く、どこから購入したかは不明ですが、【資料2】の平四郎日記明治十一年一月四日に、他人に貸与した旨の記述があります。おそらく縦覧所書籍としてではなく、平四郎の私物として注文された物だったのでしょうか。

そのほかに、町医師だった本多正幸が医学書の注文をしています。また、本多が東京滞任時に翻訳医学書を多く刊行していた英蘭堂を訪れていたことが、【資料3】の明治九年二月十一日の記事でわかります。今回、与左衛門の日記を解説できたのはわずかでしたが、以上のような書物の動きが具体的にわかりました。

では、新聞はどうでしょうか。これは、与左衛門から、直接江差に郵送されています。ちなみに江差の郵便局開局は明治五年です。ただ、少しわからないところがあります。それは、当初与左衛門は、報知社が直接縦覧所へ郵送する契約をしていたらしいことです。【資料4】をご覧ください。

#### 【資料4】

明治八年

08／08／20

(略) ○報知社江縦覧所之分時戌年十月十六日より亥年十二月  
月中マテ郵税トモ払渡受書アル

金八円二十銭七分五毛 (略)

(津祢須美 (関川与左衛門)「道中記」(12—72))

ここで、与左衛門は郵税まで払っているのですが、その後、【資料5】の与左衛門の日記にあるように、与左衛門が直接郵送しています。

#### 【資料5】

明治八年

08／12／30

(略) 亦森省吾本多□人ヨリ開紙代之コトラ申送ス合封 (略)

08／12／31

(略) ○本日ヨリ一月三日マテ報知社休業 (略)

09／01／17

(略) 八日十五日十六日三分新聞郵送ス

09／01／22

(略) 十九日廿日廿一日三分新聞出ス

09／01／25

廿三日廿四廿五三分新聞出ス (略)

09／01／31

(略) ○報知社新聞ニ付配達之義申送ス (略)

09／02／03

○一月廿九日二月二日三日都合三号新聞郵送ス

09／02／06

(略) ○四日ヨリ六日マテ新聞郵送ス (略)

09／02／09

(略) ○七日ヨリ九日マテ新聞三葉郵送ス

09／02／13

(略) ○十日十二日十三日新聞三葉郵送ス (略)

09/02/16 ○新聞十四十五十六三分郵便ニ出ス(略)

09/02/19 ○十七十八十九三分新聞紙郵便ニ差出ス

09/02/23 ○新聞紙二十廿二廿三分郵送セリ

09/02/26 ○廿四廿五廿六新聞紙三葉郵送ス(略)

09/02/29 廿七廿八廿九三分新聞郵送ス(略)

09/03/04 二日三日四日附録新聞紙郵便出ス(略)

09/03/07 五六七三分新聞出ス(略)

09/03/10 八九十三三分新聞郵送ス(略)

09/03/14 (略) 十二日十三日十四三分新聞紙出ス(略)

09/03/17 十五十六十七三分新聞出ス(略)

09/03/20 十八十九二十三分新聞紙郵送セリ(略)

09/04/07 去月廿二日ヨリ本日マテ新聞本多氏江訛江渡ス  
本年代価不残昨六日払候(略)

09/04/14 (略) 去ル九日(※見せ消)ヨリ十四日マテ新聞合封シ(略)

09/04/25 ○在所行状普通本多江菴通外ニ新聞本月十五日ヨリ廿五日マ  
テ九葉二包(略)

09/04/28 廿七廿八廿九三分新聞紙郵送ス(略)

09/05/04 (略) ○新聞を前極之事(略)

09/05/19 (略) 当去月廿九日より本日まで新聞郵送ス(略)

09/05/30 (略) 新聞紙本月三十日マテ

09/08/21 ○新聞六月九日ヨリ八月廿一日マテ 壹包  
函館塚田マテ加賀ヤ友七□ヨリ送ル(略)

09/08/24 ○廿三日廿四日二十二新聞郵送セリ

09/08/28 ○廿五廿六廿八日新聞郵送ス

09/08/31 (略) ○廿九三十卅一新聞郵送ス且本多行モ出ス

09/09/04 一二四新聞郵送ス(略)

09/09/11 八九十一新聞郵送ス(略)

(関川与左衛門「行旅日誌 二号」(12—26))

傍線部に配達や契約に関する記述がありますので、報知社の都合か何かで契約を結び直したのかもしれませんが、新聞の全国配達の実態を考える上でも興味深い行き違いです。

このような東京からの頻繁な郵送は、定期航路の開設が不可欠だったわけですが、では、東京—函館間の定期航路開設以前はどうだったのでしょうか。このあたりはまだほとんど調べておりませんが、近世と近代の流通の変容を探るといふ本プロジェクトにとっては重要な課題です。【資料6】をご覧ください。

# 【資料6】

社中ヨリ注文

一増訂表義略式 三朱ト五百文  
一増訂神事略式 二分ト五百文  
メ此処江八拾銭預ル  
第二月念七

## 東京書林

〔関川常澄（与左衛門）「出函日誌 乾（明治六年二月二十八日）三月十六日」〕（12—64）

定期航路開設直前の明治六年二月に、与左衛門が江差から函館に出かけるとき、の使い物の目録中に、このような記述がありました。「社中」というのはおそらく皇学舎のことです。<sup>（註）</sup>そこで使う神道関係の書物二冊を東京の書肆から購入するというのです。実際にその後の日記の記述で、与左衛門は函館で書物の注文をしています。このように、東京の書物を購入する際には、函館まで出て注文していたようです。近世期の文書までさかのぼって今後調査しなければならないところです。

## V. 関西—江差間の書籍・新聞流通の可能性

では、一方で関西の書物は江差に到来しなかったのでしょうか。この点に関しては、与左衛門日記のような有力な記録が無く、取引文書も今のところ見あたりません。では、無かったのかというと、どうもそうではないようです。

関川家旧蔵書の中で、縦覧所備え付けの図書か、あるいはそれと同時期に購入されたとみられる一群の書物があります。いずれも明治五年から七年に刊行された啓蒙書で、ほとんど読まれた形跡が無く、袋を備えるという、書物の保存の状況から一つのグループをなしていると考えられる書物

群です。これらは、袋や後ろ見返しにハガレ部分などに仕入印を持った物がほとんどなのですが、大阪の本屋の仕入印を持つものが大半です。当館の近代書誌・近代画像データベースから抜粋したデータ【資料7】をご覧ください。

### 【資料7】

※凡例：（請求記号・書名・著者名・刊年・補記◆仕入印の書肆名）の順序で記載。

①A 229 3.1. 3.2. 3.3. 標註剛修／故事必説・市川清流解・明十・仕入印「須富」（黒印）・「松山堂印」（朱印）・符丁あり。◆不明

②A 49 6.1. 2. 浪華史略 初編・染崎延房・須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋市兵衛／須原屋伊八／和泉屋金右衛門／和泉屋勘右衛門／藤岡屋慶次郎／森屋治兵衛／山口屋藤兵衛／鶴屋喜右衛門／枕屋喜兵衛／丁子屋平兵衛／丁子屋普兵衛／丁子屋忠七・袋（捺付）あり。袋に「藤□」という朱印（仕入印および、「モ以コ」と符丁の墨書あり。◆不明

③A 36 5.1. 農業往来・深沢菱潭・袋あり。袋に「華井氏製本記」という朱印（仕入印）および、「モフィ」という符丁の墨書あり。◆花井卯助（大阪）

④A 37 2.1: 翻刻／神教要旨：明治五年：袋あり。題簽と同様。符丁「モヒミ」（墨書）。

裏見返しに広告一葉貼付。「三教捷解／惶根草「かしこねぐさ」」書肆大坂心齋橋筋博労町角 岡田茂兵衛」。・奥付「明治壬申刻成」「刻工 津岡源兵衛」◆岡田茂兵衛（大阪）

⑤A 37 2.1. 2.2: 童蒙／教の道すじ：箕作麟祥纂輯：明治六年：仕入印「岡田」（朱印）・符丁：朱書、墨書の二種あり。◆岡田茂兵衛（大阪）

⑥A 54 4.1: 開化商売往来：松川半山：袋あり。「紀元二千五百卅三年春／松川半山編并画／開化商売往来／岡田群玉堂梓」、仕入印「大坂 河茂」（朱印）、符丁「モヒヤ」（墨書）。※多色刷り。：売捌最終行に河内屋茂兵衛。◆岡田茂兵衛（大阪）

⑦A 18 3.2: 横浜往来：仮名垣魯文：明治六年：袋：魁星印（朱印）、書肆印「万笈閣梓」（朱印）、蔵版印「江戸本石町二丁目角書籍売買所枕屋喜兵衛蔵」（朱印）、仕入印「河茂」（黒印）。一枚刷り広告二枚あり。木版。「開化童子往来」、「開化／近道子宝」書肆 大阪心齋橋筋博労町角 岡田茂兵衛 ◆岡田茂兵衛（大阪）

⑧A 41 6-1. 2. 3: 童蒙をしへ草 初編：福沢諭吉：明治五年：袋に「大野

木」という朱印（仕入印）および、「モヒミ」という符丁の墨書あり。巻の後見返し紙のウラに「大野木」という朱印（仕入印）あり。◆大野木市兵衛（大阪）

⑨A 45 7.7: 輿地誌略 二篇：内田正雄纂輯：明治六年：石川県学校蔵版：書袋が残る。見返しと同一の意匠。中央上部に魁星印。ウラに「禹」の朱丸印（仕入印）を捺す。北尾禹三郎（大阪安土町）の印か。◆北尾禹三郎（大阪）

⑩A 46 2.1. 2.2: 神判記実 初編：山口起業：明治七年：加藤長平（伊勢）刊：袋あり。見返しと同様。青刷り。印「官許」（朱印）、「初秩」（朱印）、書肆印「山田書房／一志町角／加藤講古堂／藤原屋長平／製本之記」（朱印）、仕入印「河□（※勘？）」（黒印）。◆河内屋勘助（大阪）

⑪A 55 2.1: 童蒙／習字学初：真幸正太郎：明治六年：赤志忠七（大阪）刊：袋あり。見返しと同様。魁星印、書肆印、仕入印「河静」（黒印）、符丁「モヒフィ」（墨書）。

広告一葉はさんであり。楮紙、縦一五・七糎×横一二・二糎。「紀元二千五百三十三年十一月新刻／翠榮堂安信著并画図／世界新名数 画入初編二冊出版 二編三編二冊宛追刻（略）／発兌書林 大坂安土町心齋橋南へ入 鹿田静七版／（略）」◆鹿田清七（大阪）

⑫A 59 2-1: 頒曆詳註／太陽曆俗解 第一本・花井静・明治五年・書袋を挟み込む。書袋は見返しと同一だが、「万青堂発兌」の上に「万青堂□□製本記」の朱印を捺す。ウラに「梅邨」の朱印（梅村彦七か）と「書林売捌所」「広寫」「□ごや町」「久保田三兵衛」の黒印を捺し、符丁を墨書する。ウラ見返しのハガレに「河真」の黒印を捺す。◆岡島真七（大阪）・梅村彦七（大阪）

⑬A-2533: 窮理のいまなび・吉田庸徳訳述・明治六年・書肆広告一枚挟みである。「明治六年西新刻 文明／開化文章 半紙本 全二冊」「書肆大阪心齋橋通南久太郎町 抱玉堂 中島徳兵衛」◆中島徳兵衛（大阪）

⑭A 359 2-1: Outlines of the World's History; William Swinton著; 仕入印・大阪 岡本

奥付・翻刻人 花井卯助・翻刻人 浜本伊三郎・翻刻人 田中太右衛門・翻刻人 岡本仙助◆岡本仙助（大阪）

（国文学研究資料館編「近代書誌・近代画像データベース」より抜粋。）

⑦の仮名垣魯文の「横浜往来」など、東京で購入しても良さそうな物にも、大阪の書肆の仕入印が押してあります。また、仕入印と同書肆の広告が挟み込まれているものもあり、これらの本がある時期に一括して関西からもたらされた可能性は高いと考えます。その際、気になるのは最初に述べた【資料2】にある、森省吾が関川家の北前船に注文書を出したり、北

前船からおろした荷物の荷解きをしている記述です。この北前船によって、縦覧所開設時にまとめて書籍が購入された可能性はないでしょうか。これは取引文書が出てくればすばらしいのですが、今のところ目録を見ても見あたりません。しかし、未整理の文書の中に紛れている可能性も捨てきれません。今後調査を進めていく予定です。

もう一つは、江差町郷土資料館が所蔵している明治期の新聞のいくつかは、関西の新聞販売所の印が押されていることです。例えば江差町郷土資料館に所蔵されている「大阪日報」（明治十年五月二日）には「神戸北長狭通五丁目 日弘堂」という朱印が押されています。ここに所蔵されている新聞は、必ずしも関川家旧蔵のものばかりではないようですが、江差にもたらされたものという点では、今回のプロジェクトの重要な研究対象です。更にこれらの新聞には郵送のための切手が直接貼付されたものが多く、関西から誰がどのように新聞を入手したのか、困難であると思いますが、今後何かわかればよいと期待しております。

以上、長くなりましたが、これで江差町の明治初期の書籍流通に関する調査の現状報告を終わります。

（註）その後、平成十九年七月の江差町郷土資料館調査で次の資料を見ることができた。

明治六年改記（略）

一八十銭 関川常澄江渡し

右は表義神事略式代

(「皇学社掛金出納」〔25—44〕)

これにより、明治六年の函館での『表義略式』『神事略式』の購入は皇学舎のためであったことが確認できた。

※掲載に当たり、当日の発表資料を一部省略し、資料番号の付け替えを行いました。また、当日は会場から翻字の訂正等多くのご指摘・ご意見をいただきました。感謝申し上げます。